

2021年10月31日 主日礼拝

説教題「礼拝者として生きる」ローマ信徒への手紙 12章 1～2節

主任牧師 加藤 誠

**「こういうわけで兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして獻げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です」(ローマ 12章1節)**

1931年に大谷賢二牧師が伝道を始めてちょうど90年の節目の年に、主なる神は大いなる憐れみをもって大井バプテスト教会に新しい礼拝堂を与えてくださいました。伝道最初期の借家の礼拝堂から数えると6番目の礼拝堂になります。

2014年に新礼拝堂建築委員会が建ち上がって丸7年。多くの紆余曲折がありましたが、特に一年半前、4月からの緊急事態宣言の発出を前に、冷たくみぞれが降る中で開催された3月29日の総会が途中で流れた後、コロナ禍によって目の前に立ちふさがる大きな壁を前に私たちは行き詰まり、「もう建てられないのではないか」という思いがよぎりました。けれども主なる神が私たちの背中をそっと押して、私たちの力では開けなかった扉を開けてくださったのでした。

このとき二つのことを覚えてたいのです。一つは、設計についての話し合いのプロセスで私たちの間には時として激しい意見の衝突がありました。建築に対して厳しい意見も飛び交いました。けれどもその意見の一つひとつが神さまの御手の中においては大切で必要なものだったということです。バプテストとしての合意形成のために、みんなで話し合うことはとてもしんどい時がある。けれども、その多様で一見バラバラの中に働かれる神さまを見上げていくことの大切さを私たちは学ばされました。もう一つは神さまの「時」ということです。私たちは多くの回り道をし、時間を要しましたが、結果として振り返ってみると建築工事費の谷間の比較的安い時に契約させていただいたことになったようです。神さまが一番ふさわしい「時」を整え導いてくださったのでした。ただ渦中にいる時、神さまの「時」を知らない私たちは焦り、ため息をつき、もがき、自らの信仰の未熟さを露呈するわけですが、その時に大谷レニー先生がわたしをまっすぐ見ながら語られた言葉が忘れられません。「加藤先生、神さまを信じて。教会を信じて」と。多様なお互いの中に、そして私たちには測り知れない「時」の中に生きて働かれる神さまを覚えてたいのです。

さて、今日私たちがこの場所に集められたのは、自分たちの祈りと献金でこの素晴らしい礼拝堂を建てることができたと喜ぶためではなく、ただこの建築を最初から最後まで導き、信仰の薄く未熟な者たちを励まし続けてくださった主なる神に感謝をささげ、主の御名を賛美するためです。そして主なる神がこの建物を通して私たちに何を期待されているのかを、皆で聴き取っていくためです。

旧礼拝堂から新しい建物に大切に引き継がれたものとして、御影石の門柱や旧礼拝堂の鐘や十字架、講壇などがあります。もう一つ、形はないけれども確かに引き継がれたもの。それは早天祈祷です。早天祈祷は緊急事態宣言で礼拝に集まらない時にも、旧礼拝堂が解体された間も続けられてきました。そして新しい礼拝堂が建

ち、礼拝よりも先に新しい祈祷室で早天祈祷が始まりました。「見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ」。見えるものは一時的であり、やがては過ぎ去る。しかし見えないものは永遠に存続する。その永遠に存続するものに目を注ぎ続け、この世界に今日も静かに語りかけている主なる神の声を聴き取っていく。この祈りの灯が私たちの教会の礎にあることをしっかり心に刻みたいのです。

主イエスは、弟子たちを「使徒」と名付けました。傍に置いておくためだけではなく、この世界に向けて派遣するためです。主イエスの傍で神の国の話を聞き、神の国の食卓を囲む。こんなに楽しくうれしいことはありませんが、しかしそれで終わるならサロンです。主イエス御自身、この世界に神の言葉を伝えるために人として一番小さな姿を生きられました。「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。聖霊を受けよ」。十字架の釘跡を身に受けた復活の主が、暗い部屋の中に閉じこもっている、おびえた弟子たちに聖霊を吹き入れた時、弟子たちはこの世界に遣わされるものとされたのでした。

私たちは何のために礼拝堂を建てたのでしょうか。神を賛美するためです。静かに主の語りかけに聴くためです。そして命の言葉を受けて、この世界に主イエスと共に遣わされ、隣り人と共に生きていくため、私たち一人ひとりの人生が「礼拝者」として形づくられていくためです。信仰者にとって一番大切なことは、神と共にあることでしょう。日々祈りで神とつながり、心と体を神に向けて歩むこと。ぶどうの枝が幹につながっていなければたちまち枯れてしまうように、私たちも神につながっていないなら何の実も結ぶことができません。荒れ野の40年、イスラエルの民は幕屋という移動式礼拝所を携えて、日々礼拝しながら旅を続けました。もし彼らの暮らしの真ん中に礼拝がなければ、40年もの苦難に満ちた旅を続けることはできなかつたでしょう。

神につながっていないなら、私たちは自己中心で目に見える幸いを追いかける空しい存在にすぎません。主の愛を知らないなら、私たちは自分勝手な愛で自分のことすら正しく愛せず、隣人を大切にできない、悲しい存在にすぎません。しかし神の愛につながれるとき、私たちは拙く未熟な存在でありながらも、自分を真に愛してくださる方の愛によって強められ、自己中心から少しでも神と隣人に向かう歩みを始めることができる。この世界を覆う暗闇と荒れ狂う嵐の中で、それでもイエス・キリストという希望を分かち合い、人びとの心を温かく照らす灯を分かち合うことがゆるされていく。聖書が今日も私たちに告げている福音を両手いっぱい大切にいただいて、この世界にあって礼拝者として生きていきたいのです。新しい礼拝堂が、そのような礼拝者たちの祈りと賛美であふれる場所となりますように。

「神さま、みんなの礼拝堂がもうすぐできます。あそこでたくさんの人が礼拝しますように！」、「礼拝堂をまもってください！」、「礼拝堂が礼拝堂になりますように！」。あけぼの幼稚園の園児が祈ってくれたこれらの祈りが、大井バプテスト教会の新礼拝堂の上になりますように。祈ります。